

保育者養成の課題 2

— 保育所実習指導から —

吾 田 富士子

1. はじめに

本学科が短期大学から 4 年制大学に改組転換して、6 年が経過した。この間、保育施策として、保育士資格法定化にはじまり、公立保育所運営費の一般財源化、公立民営化、保育所設置規制緩和、第三者評価実施、構造改革特別区での試行、総合施設モデル事業、認定子ども園等が実施され、保育士養成課程も改訂された。これにより 2002 年度から、養成校の独自性が図られるべく大綱化がなされると同時に、「家族援助論」「障害児保育」「養護内容」の必修化、「乳児保育」の講義科目から演習科目への変更等に加え「保育実習」時間数が増加された。本学においても上記改訂に加えて、「保育所実習指導 I・II」の必修化を実施し、実習教育の充実を図った。

改組転換初年度の保育所実習から、カリキュラム構造化の課題として①共通科目を含めた開講科目の見直しと専門科目間の連携および講義内容の見直し②人間性構築のためのボランティア等課外活動の必要性③実習教員確保によるきめ細かなスーパービジョンの必要性があげられたり。本論は、6 年間の保育所実習の実施状況を整理し、実習園からの評価と学生の自己評価を縦断的な視点から見直すと同時に、初年度の課題を含めた本学の 4 年制保育者養成校としての課題整理とカリキュラムの構造化実施の具体的な試論とする。

2. 本学の保育所実習の変遷

2-1 保育所実習実施の変更点

改組当初の本学カリキュラムの特徴として、3 年次後期に講義を配置せず、実習を集中させた点があげられる。すなわち、幼稚園実習（3 週間）、保育所実習（2 週間）、福祉施設実習（2 週間）を 9～10 月、10～11 月、11～12 月に行い、それぞれの事前・事後指導を各実習前後に配置した。この形態は、学生にとって、実習に集中できるというメリットがある一方で、実習で受けた心身への影響が次の実習へダイレクトに影響してしまうという問題もある。そのため、きめ細かな事後指導やスーパービジョン、休養の時間が必要となる。また、地方で実習する学生にとっては、事前・事後指導のために大学に戻り再び地元に戻るといった経済的・時間的負担がある。一方教員にとっては、実習学生への講義はないものの、他 3 学年の講義・卒論指導の合間に 3 種類、各自計 20 施設前後の実習訪問が集中するという負担があり、3 年次後期のゼミナールを別に設定する必要もある。さらに、カリキュラム上、3 年後期に講義を配置できないため、4 年次に多くの必修科目を配置しなければならない弊害や、3 年次の全実習終了後の学生にみられる学習意欲減退の問題も浮き彫りになった。

完成年度を迎え、2004 年度入学生から実習時期を変更し、3 年次までにほとんどの必修科目が履修できるようにした。すなわち、保育所実習は 2 年次 2～3 月、幼稚園実習は 3 年次 8～9 月、施設実習は 3 年次 11～12 月とする。また、「保育所実習指導 I・II」「幼稚園実習指導 I・II」「施設実習指導」を科目として起こし実習実施学年に配置した。

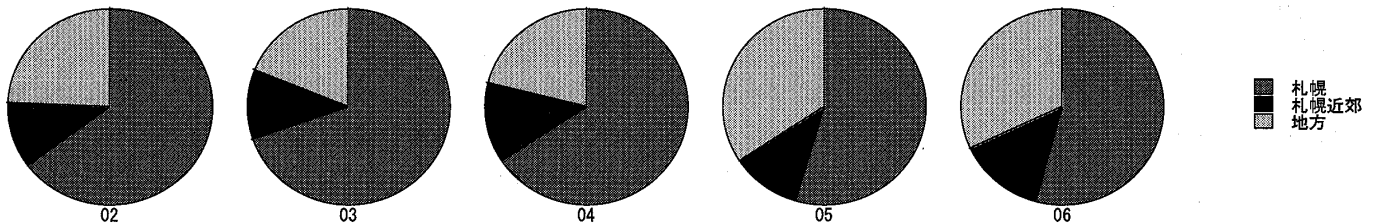
保育所実習に関しては、前述した保育士養成課程改訂に伴い、2002 年度入学生から実習期間を実質 20 日間とした。

2-2 実習園の所在地と設置主体

5年間の実習園425園の内²⁾、札幌が6割強、札幌近郊は1割強、地方が3割弱となっている。当初は、幼稚園実習と施設実習の間の実習ということもあり、地方の学生も地元ではなく札幌での実習を選ぶ割合が高く、7割弱が札幌に集中した。しかし、実習期間の増加と学年変更により、学生にとっての最初の実習であり、実質20日間(延べ約1ヶ月)の長期に渡る実習を、親元から行なうことを希望する割合が高まり、最近では札幌での実習は5割に減少し、地方での実習が2割から3割強と増加した。この傾向は今後も続くと思われる。

表-1 実習園の所在地

	全体		2002		2003		2004		2005		2006	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
札幌	262	61.6	53	64.6	59	69.4	59	65.6	44	54.3	47	54
札幌近郊	52	12.2	9	11	10	11.8	12	13.3	9	11.1	12	13.8
地方	111	26.1	20	24.4	16	18.8	19	21.1	28	34.6	28	32.2
合計	425	100	82	100	85	100	90	100	81	100	87	100

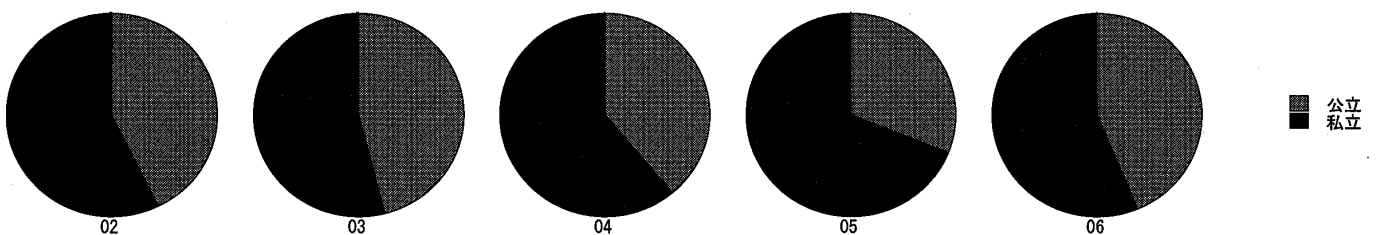


保育園の場所／実施年

また公立園が4割、私立園が6割であり、年次による変動はみられるものの、この割合の傾向は大きく変わってはいない。公立民営化により札幌市内近郊の公立園は減少してきているが、地方では自治体が保育運営の中心を担っており、地方での実習増加のため、保育所設置主体の差がみられない結果となっている。

表-2 実習園の設置主体

カテゴリー	全体		2002		2003		2004		2005		2006	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
公立	172	40.6	35	42.7	39	45.9	35	38.9	25	31.3	38	43.7
私立	252	59.4	47	57.3	46	54.1	55	61.1	55	68.8	49	56.3
合計	424	100	82	100	85	100	90	100	80	100	87	100



設置者／実施年

表-3 実習園の評価

(%)

評価項目		大変よい	実習生として適切	努力を要する
保育 実習	実習への意欲・態度	57.1	39.1	3.8
	出勤状況	62.5	35.6	1.9
	職員との協力と誠実さ	50.4	47.8	1.9
	保育者としての自覚	31.0	65.6	3.3
指導能力	子どもとのかかわりと子ども理解	33.2	60.6	6.2
	指導計画の立案と準備・研究	41.6	53.4	5.0
	援助・指導の適切さと指導技術	13.8	82.1	4.0
	創意工夫と探究心・熱心さ	47.1	49.3	3.6
記録	記録の適切さ	46.2	47.6	6.2
	事務的な仕事の処理	34.8	62.5	2.6
総合評価		43.4	55.2	1.4
実習II	課題に対する探究心	48.8	48.8	2.4
	子ども・保育理解の深さ	28.5	66.8	4.7
	総合評価	40.1	58.3	1.6

表-3のうち、「保育実習」の項目は過去5年間の実習園からの評価の分布である。「実習II」は実習時数が増加した2005年度実施からの2年間の平均である。全項目ともに「大変よい」「実習生として適切」を合わせて93%以上となっており、概ね適切な実習状況であると判断される。どの項目にも存在する数%の「努力を要する」と評価される学生については、個別指導の必要がある。特に、「努力を要する」の上位を占める「指導能力」に関しては、具体的な子どもとの生活での学習が有効であるため、保育所実習Iでの個別指導機会の検討が必要であり、また「記録」についても、実習Iでの指導方法の検討が必要である。さらに、「子どもとのかかわりと子ども理解」「指導計画の立案と準備・研究」「子ども・保育理解の深さ」に関しては、実習科目のみならず、他専門教科目群のカリキュラムの構造化が必要であり、加えて「実習態度」に関連する点として一般教養科目群を含めた幅広い人間性を育成するためのカリキュラムの必要性があると考えられる。

実施年による比較では、ほとんどの項目で差が見られなかったがいくつかの特徴が見られた。

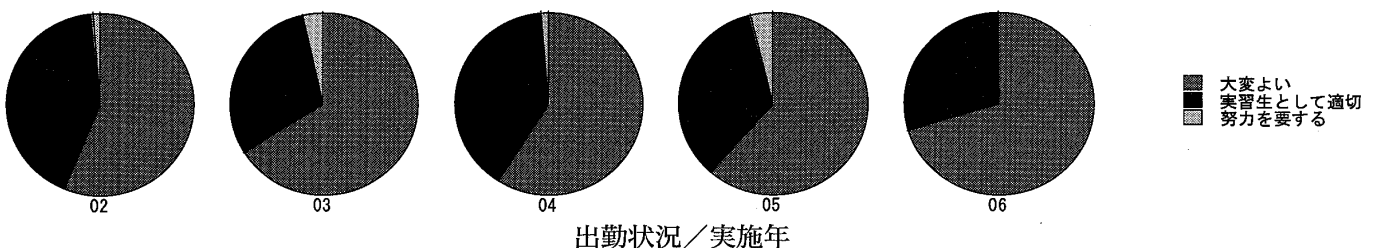
3-1 2006年実施学生の評価が他年度よりも全体的に高い傾向

(1)出勤状況

体調不良による欠勤・早退は例年大差ないが、2005年度までは「大変よい」が5～6割にとどまっているのに対し、2006年は7割、「努力を要する」は0という結果となった。これは、2005年度までは幼稚園実習終了2週間後に保育所実習であったため、前の実習での体調不良からの回復が不十分であった

表-4 出勤状況の評価

	全体		2002		2003		2004		2005		2006	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
大変よい	265	62.5	46	56.1	56	65.9	53	58.9	49	61.3	61	70.1
実習生として適切	151	35.6	35	42.7	26	30.6	36	40	28	35	26	29.9
努力を要する	8	1.9	1	1.2	3	3.5	1	1.1	3	3.8	0	0
合計	424	100	82	100	85	100	90	100	80	100	87	100



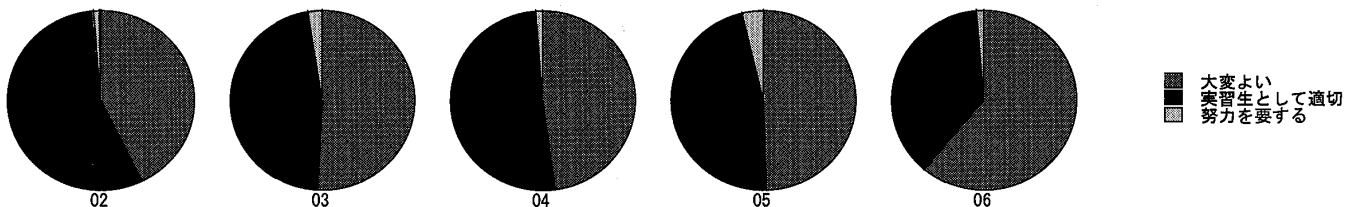
り、前の実習終了後に体調を崩し回復しないまま次の実習となったり、必ずしも良好な状態での実習でない学生が多くいたことによる。この年から2年生での実施となり、学生にとっては最初の実習となり、万全の体調で実習に臨んだ者が多かった。また厳寒期の2月実施のため、事前にインフルエンザ予防接種を受けた学生も多かったことによると考えられる。

(2)職員との協力・誠実さ

2005年度までは「大変よい」が4～5割であったのに対し、2006年は6割になっている。これは学年が下がったことによる影響と考えられる。道内の保育士養成校は、本学以外は短大もしくは専門学校であり、2年制ないしは3年制課程であり、実習は1～2年次に行なわれている。本学の学生は他養成校生に比べ真面目であるがおとなしく消極的であるという評価が大きかった。そこには年齢によるものも多くあると考えられる。本学が短大から4年制に移行した際、教員にとっての大きな発見は学生の変貌の様子であり、20歳を境に2年生から3年生への変化には目を見張るものがあった。無邪気な明るさから多少なりとも分別のある大人の入り口にさしかかっていることを実感させる変貌振りである。子どもへの対応も、何も考えずに子どもの中に飛び込んで行く10代に比べ、20代は一步引いて接する姿が多く見られるようになった。しかし、それは、必ずしも職員たちとの交流には反映されず、むしろ見た目は社会人であっても内実が伴わないことへのギャップが評価に反映されていると考えられる。現役保育者の多くは短大か専門学校卒生であるため、特に移行初年度は、保育者から「4年間も一体何を勉強しているの?」「短大とは違う勉強を沢山しているのでしょうか」といった質問も多くなされ、保育者側にも後輩指導とは異なる指導の必要性があるのか、あるとしたらどの様に行なえばよいのか、と言った戸惑いが多く見られた。また学生の側も、4年制の学生であるにも関わらず保育技術が伴わなかったり、同年齢で働いている保育者との関係構築の難しさや自身の社会人としての常識のなさに落ち込んだりと、指導する側される側双方に戸惑いが多く見られたことは学生の自己評価からも読み取れる。そのような戸惑いは実習を重ねるにつれ減少し、実習訪問でも4年制学生であることへの構えはほとんど見られなくなった。こうした背景に加え、2006年からは2年次実習となり、他養成校と同じ実施状況となった事で、学生側も保育者側も円滑な対応がなされたのではないかと推測される。

表-5 職員との協力・誠実さ

	全体		2002		2003		2004		2005		2006	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
大変よい	213	50.4	35	42.7	43	50.6	42	47.7	40	49.4	53	60.9
実習生として適切	202	47.8	46	56.1	40	47.1	45	51.1	38	46.9	33	37.9
努力を要する	8	1.9	1	1.2	2	2.4	1	1.1	3	3.7	1	1.1
合計	423	100	82	100	85	100	88	100	81	100	87	100



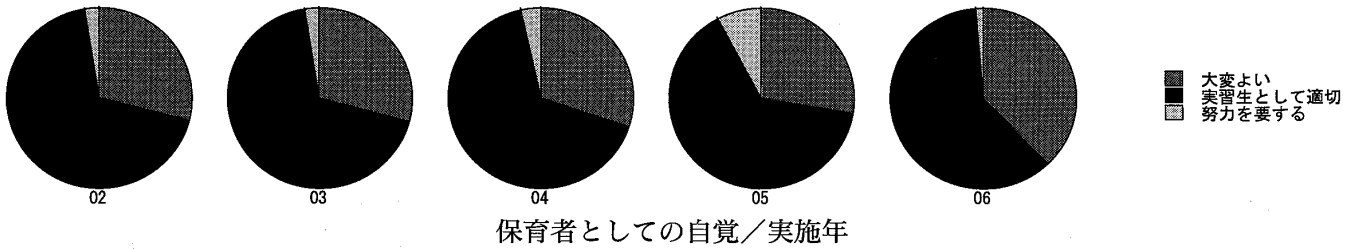
職員との協力・誠実さ／実施年

(3)保育者としての自覚

2005年度までは、「大変よい」が3割、「実習生として適切」が7割であったが、2006年は「大変よい」が4割近くに増加した。これは保育所実習Ⅰ終了と同時にこの実習が始まるため、実習Ⅰでの保育者としての意識が断絶されず、継続されることによるのではないかと考えられる。

表-6 保育者としての自覚

	全体		2002		2003		2004		2005		2006	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
大変よい	131	31	24	29.3	25	29.4	27	30.3	22	27.8	33	37.9
実習生として適切	277	65.6	56	68.3	58	68.2	59	66.3	51	64.6	53	60.9
努力を要する	14	3.3	2	2.4	2	2.4	3	3.4	6	7.6	1	1.1
合計	422	100	82	100	85	100	89	100	79	100	87	100

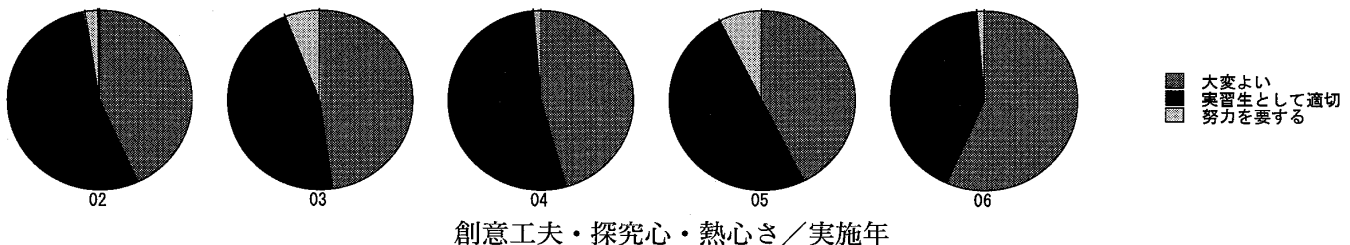


(4) 創意工夫・探究心・熱心さ

2005年度までは、「大変よい」が4割程度であったのに対し、2006年は5割を大きく超えた結果となった。これは保育所実習Ⅰとの継続に加え、この年から始まった「保育所実習指導ⅠⅡ」の効果が考えられる。実習Ⅰと連動して毎週、グループでの実践計画・準備・反省を行なっている。科目を立ち上げる以前からこうしたグループでの活動は行なわれていたが、自分たちの活動で自己完結し、その場だけの単発的な実践活動に終始した。しかし、科目として立ち上げることで、学生は自分たちの実践をじっくりと考え準備する機会ができただけでなく、他者に実践内容を発表することや実践の様子をビデオで視聴する中で子どもの様子を改めて知り、客観的な反省をすることができ、また他者の実践を見聞きすることで実践の幅を広げ、応用力を身につけたと考えられる。さらに、年間を通して子どもたちの発達の様子を知ることにもつながっている。こうしたことがこの結果の要因と考えられる。

表-7 創意工夫・探究心・熱心さ

	全体		2002		2003		2004		2005		2006	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
大変よい	198	47.1	35	43.2	40	47.6	40	45.5	34	42.5	49	56.3
実習生として適切	207	49.3	44	54.3	39	46.4	47	53.4	40	50	37	42.5
努力を要する	15	3.6	2	2.5	5	6	1	1.1	6	7.5	1	1.1
合計	420	100	81	100	84	100	88	100	80	100	87	100



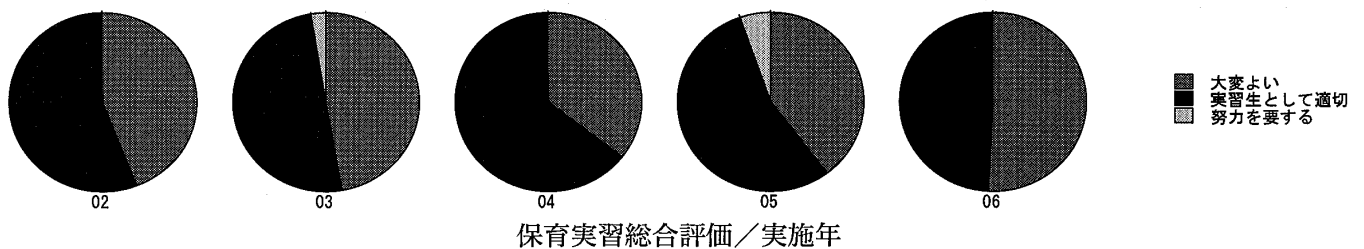
(5) 保育実習総合評価

2006年は「大変よい」が5割を超え、「実習生として適切」をわずかながら上回った。これはこれまで見てきたように、親元からの実習である安心感や、実習Ⅰとの継続や「保育所実習指導Ⅰ・Ⅱ」の学びの中である程度の意識や心構えができていることが影響し、加えて実習園側の本学実習への理解が進み、

学生対応も4年制学生であることよりも実習生であることに重点を置いたものとなったことによると考える。またこうした園側の姿勢は、子どもにダイレクトにぶつかっていく2年次生であるということも影響していると考えられる。

表-8 保育実習総合評価

	全体		2002		2003		2004		2005		2006	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
大変よい	183	43.4	36	43.9	40	47.1	32	35.6	31	39.7	44	50.6
実習生として適切	233	55.2	46	56.1	43	50.6	58	64.4	43	55.1	43	49.4
努力を要する	6	1.4	0	0	2	2.4	0	0	4	5.1	0	0
合計	422	100	82	100	85	100	90	100	78	100	87	100

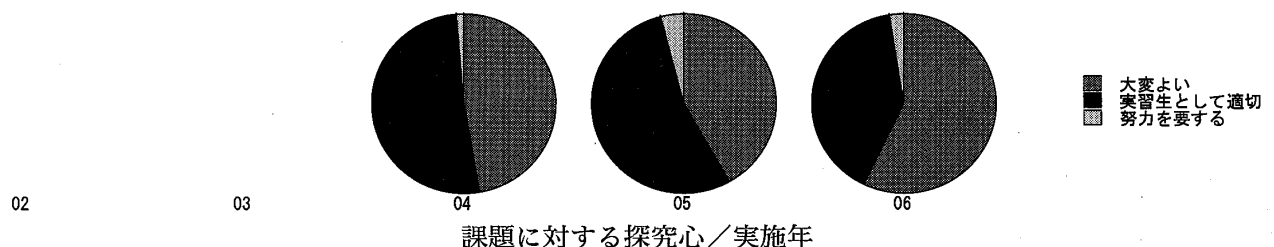


(6)課題に対する探究心

これは「実習Ⅱ」の評価項目で、新カリキュラムになった2004年度からの統計である。「大変よい」は5割に満たない状況であったが2006年は6割近くとなっている。学生は良好な健康状態で、子どもの中に入りこんでの実習で充実感を持って学んだのではないだろうか。

表-9 課題に対する探究心

	全体		2004		2005		2006	
	数	%	数	%	数	%	数	%
大変よい	41	47.1	41	47.1	33	41.8	49	57
実習生として適切	45	51.7	45	51.7	43	54.4	35	40.7
努力を要する	1	1.1	1	1.1	3	3.8	2	2.3
合計	87	100	87	100	79	100	86	100



3-2 「努力を要する」が全項目で05年実施学生に高い

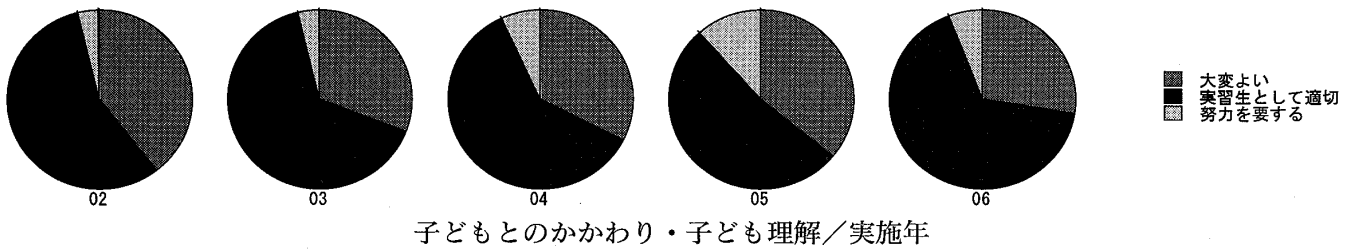
保育職への希望が薄く、実習への意識が低い学生がいたことにもよるが、後述するように充実感を持って実習終了した学生がやや少なかった。この学年は最初の幼稚園実習が大変充実していたため、その状況と全く異なる実習内容を要求される保育所への戸惑いが見られることや、最初の実習で全力投球したために保育所実習の前から意欲喪失していた、という学生も少なくなかったことからこのような結果になったと推測される。

3-3 「子どもとのかかわりと子ども理解」の評価は06年実施学生で最も低い

3-1 でみたように2006年実施学生は他実施年学生に比較して多くの項目で概ね評価が高かったが、この項目は評価が最も低い結果となった。日常生活における子どもとのふれあいが少ない現状は変わらないが、幼稚園実習を終了していない点が他学年との違いであり、この結果の要因と考える。

表-10 子どもとのかかわりと子ども理解

	全体		2002		2003		2004		2005		2006	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
大変よい	139	33.2	32	39.5	26	31	29	32.6	28	35.9	24	27.6
実習生として適切	254	60.6	46	56.8	55	65.5	54	60.7	41	52.6	58	66.7
努力を要する	26	6.2	3	3.7	3	3.6	6	6.7	9	11.5	5	5.7
合計	419	100	81	100	84	100	89	100	78	100	87	100

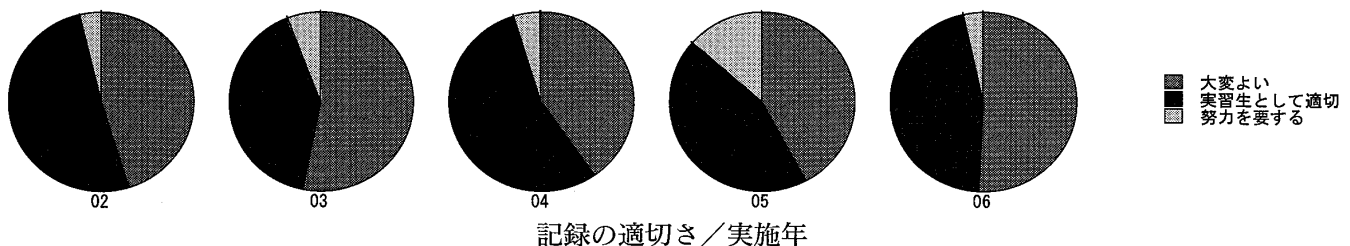


3-4 03年と06年実施学生が他学年より高かった項目①出勤状況②相違工夫・探究心・熱心さ③記録の適切さ④保育実習総合評価

2003年実施学年から保育所実習Ⅰに実習助手を配置し、指導の充実を図った。このことは、それまで一人の教員の空き時間を利用して実習指導を受けていた90名の学生にとって、充分とはいえないが指導の時間が確保され、実習をする上での応用力が身につく、意欲向上につながったと判断できる。この点が良好な出勤状況や創意工夫・探究心・熱心さに反映されたと思われる。また、実習日誌の添削指導も複数の目で行なわれることとなり、きめ細かな指導がなされるようになったことが記録の適切さに反映されたと判断される。さらに出勤状況に関しては、この年の気候がよかったために体調を崩す学生が少なかったことの影響もある。

表-11 記録の適切さ

	全体		2002		2003		2004		2005		2006	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
大変よい	195	46.2	37	45.1	45	52.9	35	40.2	34	42	44	50.6
実習生として適切	201	47.6	42	51.2	35	41.2	48	55.2	36	44.4	40	46
努力を要する	26	6.2	3	3.7	5	5.9	4	4.6	11	13.6	3	3.4
合計	422	100	82	100	85	100	87	100	81	100	87	100



一方 2006 年実施学生は、実習 I との連続性や「保育所実習指導 I・II」の効果等があげられるだろう。

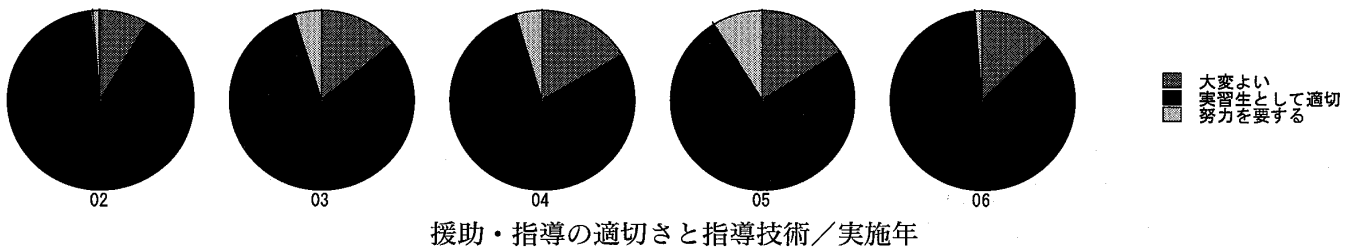
それでは 2004 年・2005 年実施学生についてはどのように考えるべきか、次の学生の自己評価で検討する。

3-5 02 年実施学生が他学年より低かった項目①職員との協力・誠実さ②援助・指導の適切さと指導技術

職員との協力については 3-1 (2) に示した。援助・指導の適切さと指導技術については、実習担当者が一人体制での 90 名ほどの学生指導に不十分さがあったことに加え、4 年制大学の学生への現場理解が充分ではない状況での実習で、学生が力を充分発揮できなかったことも考えられる。

表-12 援助・指導の適切さと指導技術

	全体		2002		2003		2004		2005		2006	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
大変よい	58	13.8	7	8.6	12	14.3	15	16.9	13	16.3	11	12.8
実習生として適切	345	82.1	73	90.1	68	81	70	78.7	60	75	74	86
努力を要する	17	4	1	1.2	4	4.8	4	4.5	7	8.8	1	1.2
合計	420	100	81	100	84	100	89	100	80	100	86	100



3-6 02 年実施学生が他学年より高かった項目は子どもとのかかわり・子ども理解

学生指導体制や現場の大学理解が不十分な中で 4 割の学生が「大変よい」の評価であった（表-10 参照）。短大時代より本学の学生は「即戦力にはならない（実践力はない）が、子どもの観察が優れている」という評価を頂いてきたが、現在でもその傾向は継続されており、子どもの中に飛び込むことよりも、子どもを客観的に理解しようとする姿勢が他養成校学生より強い傾向にある。大学初年度の学生たちは自由に動けなかった分だけ子どもをよく観察したことにより、深い理解と適切な対応がなされたのではないであろうか。

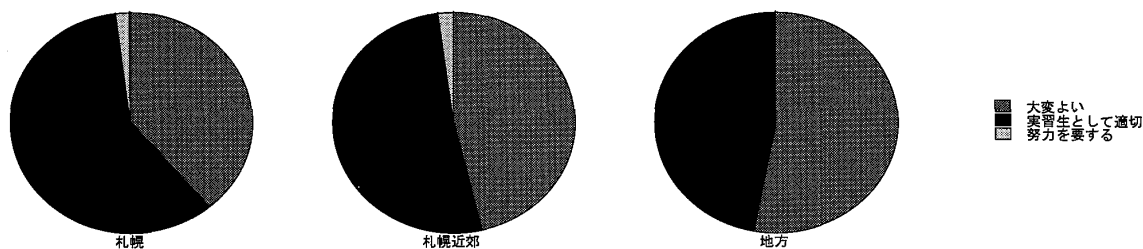
3-7 ほとんどの項目で地方の評価が高い、「努力を要する」は札幌で高い

例えば保育実習総合評価では札幌の場合「大変よい」が 4 割に満たないのに対し、地方の場合は 5 割を超え、「努力を要する」は札幌と札幌近郊が 1.9% であるのに対し、地方は皆無である。これは、学生の側からすると地方の場合、地元の保育園では近所の知り合いが園児や職員であることが少なくなく、家庭的な雰囲気を実習に臨むことができるという利点が挙げられる。また現場の側でも地元の子どもが実習生として帰ってきたという歓迎ムードが漂っていることも少なくない。一方、札幌の場合は地元とはいえ、知り合いが保育園に関わっていることはほとんどなく、学生にとっても現場にとっても未知の人間関係の中での実習となる。また現場では地方に比べ、一園の年間の受け入れ実習生数が多く、比較対象があるため、評価のための一定の基準がある。また、通常業務上の課題も多岐に渡っている場合が多い。そうした状況で、必然的に実習生へ求めるものも高くなっていると考えられる。

子どもとのかかわり・子ども理解に関しても同じ傾向にあるが、さらに札幌で「努力を要する」が高い点が指摘できる。これは「子ども・保育理解の深さ」や「創意工夫・探究心・熱心さ」「記録の適切さ」

表-13 保育実習総合評価

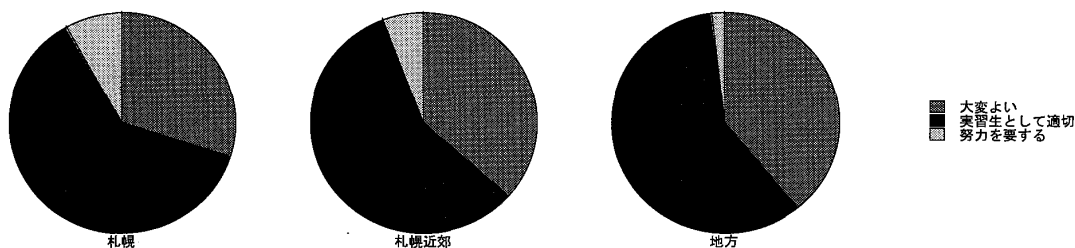
	全体		札幌		札幌近郊		地方	
	数	%	数	%	数	%	数	%
大変よい	183	43.4	101	38.8	24	46.2	58	52.7
実習生として適切	233	55.2	154	59.2	27	51.9	52	47.3
努力を要する	6	1.4	5	1.9	1	1.9	0	0
合計	422	100	260	100	52	100	110	100



保育実習総合評価／保育園の場所

表-14 子どもとのかかわり・子ども理解

	全体		札幌		札幌近郊		地方	
	数	%	数	%	数	%	数	%
大変よい	139	33.2	77	30	19	36.5	43	39.1
実習生として適切	254	60.6	159	61.9	30	57.7	65	59.1
努力を要する	26	6.2	21	8.2	3	5.8	2	1.8
合計	419	100	257	100	52	100	110	100



子どもとのかかわり・子ども理解／保育園の場所

でも顕著な傾向であった。この結果から、学生の保育学科志望の動機と保育職志望の意識、学生本人の資質との関連が示唆される。近郊に多くの高等教育機関が存在している札幌の学生よりも、地方の学生の方がより現実的な選択をしていると考えられる。このことから、入学の際の選抜方法についての検討も必要と考えられる。

4. 学生の自己評価

表-15 は学生の自己評価である。選択項目の内容が異なるため一覧表での表示は適切ではないが、実習園の評価と対比するため作成した。

「実習態度」では、意欲・態度は全体の2割が消極的と回答し（「どちらかという消極的」含む）、「出勤状況」でも2割が何らかの支障があったとし、一部の学生にとっての課題となった。しかし、職員との協力では約半数が消極的と回答し（「どちらかという消極的」含む）、この点が多くの子供にとっての課題である事が分かる。保育者としての自覚はほぼ全員が自分なりに持っているが、不十分と回答し

表-15 学生の自己評価

(%)

評価項目		①	②	③	④	⑤	選択項目	
保育 実習	実習態度	実習への意欲・態度	24.4	57.6	16.7	1.2		A
		出勤状況	80.5	7.3	8.8	3.4		B
		職員との協力と誠実さ	10.1	44.7	43.0	2.2		A
		保育者としての自覚	45.1	54.1	0.2			C
指導能力	実習	子どもとのかかわりと子ども理解	5.9	91.9	2.2			D
		指導計画の立案と準備・研究	25.4	45.7	9.0	15.3	4.5	E
		援助・指導の適切さと指導技術	6.9	48.5	43.9	0.7		F
		創意工夫と探究心・熱心さ	22.2	71.0	6.8	0		G
記録	実習	記録の適切さ	60.3	34.7	4.9			H
		事務的な仕事の処理	77.8	20.2	2.0			I
総合評価		25.9	63.5	10.6			J	
実習II	実習	課題に対する探究心	40.4	42.0	15.7	2.0		A
		子ども・保育理解の深さ	60.3	37.0	2.7	0		K
		総合評価	20.4	67.8	11.8			J

選択項目

- A ①積極的 ②どちらかという積極的 ③どちらかという消極的 ④消極的
 B ①遅刻・早退・欠勤なし ②遅刻・早退あり ③欠勤あり ④欠勤と遅刻か早退あり
 C ①自覚できた ②精一杯行なったが自覚が足りない部分もあった ③自覚を持てなかった
 D ①充分理解しかかわった ②自分なりに理解しかかわった ③充分なかかわり・理解ができなかった
 E ①充分できた ②精一杯だが不十分 ③時間不足 ④自分の能力不足を感じた ⑤充分できなかった
 F ①適切 ②保育士の指導により適切にできた ③精一杯だが不適切 ④適切に行なえなかった
 G ①充分 ②充分ではないが自分なりに行なえた ③どちらかという不十分 ④不十分
 H ①適切 ②保育士の指導により適切に行なえた ③不適切
 I ①適切 ②時間がかかったが適切 ③不適切
 J ①精一杯行なえたので高く評価できる ②実習生として適切 ③努力を要する
 K ①深まった ②どちらかという深まった ③どちらかという深まらなかった ④深まらなかった

た者が5割を超えた。

「指導能力」は全体的に自己評価が低く、精一杯行なったが不十分であったと回答しており、多くの学生にとっての課題である。子どもに対して、自分なりのかかわりはできたが充分理解できたと回答した学生は1割にも満たず、指導計画の立案等も充分できたと解答した学生は3割以下となり、自信のなさが伺える。援助・指導については約半数が保育士の指導により適切に行なえたと回答しており、今後こうした回答が増加するような園との協力体制が必要である。

「記録」は6割が適切、3割以上が保育士の指導により適切に行なえたと回答、全体の9割以上が適切と評価した。

総合評価は「高く評価できる」と「実習生として適切」を合わせて9割が回答し、ほぼ満足した結果となっている。

「実習II」は3年間の評価であるが、課題に対する探究心は約8割以上が積極的と回答、子ども・保育理解も深められたが9割以上を占め、総合評価も9割が高い評価、あるいは実習生として適切と回答し、一部の学生にとっての課題となった。

実施年による比較ではほとんどの項目で差が見られなかったが以下のような特徴があった。

4-1 全体的に03年と06年実施学生の自己評価が高い

意欲・態度、職員との協力、子どもとのかかわりと理解、子どもへの援助・指導技術、創意工夫・探究心・熱心さの項目でこのような結果となった。表-16 創意工夫・探究心・熱心さでは、「充分あった」

と回答した割合は、他年度は1割から2割弱であるのに対し、2003年度と2006年実施学生は3割以上となっている。また、表-17 意欲・態度でも「積極的」は他が1～2割に対し2003年度と2006年は3割を超え、「どちらかというとなが積極的」を加えた積極的群は他が7～8割であるのに対し、当該年度は約9割である。前述したように2003年実施学年から実習助手の配置、2006年実施学年から「保育所実習指導Ⅰ・Ⅱ」が始まる。2006年実施学生は実習園からの評価も高く、学年が低いことありのびのびと実習したと考えられる。また、2003年実施学年は4年制大学への改組2学年目であり、2002年実施学年に全ての期待・不安が持ち込まれていた分、学生自体は大らかであり、自己評価が高い学年であったことも影響しているであろう。

表-16 創意工夫・探究心・熱心さ

	全体		2002		2003		2004		2005		2006	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
充分あった	91	22.2	8	11.6	27	32.9	11	12.4	15	18.3	30	34.1
自分なりにあった	291	71	54	78.3	51	62.2	73	82	59	72	54	61.4
どちらかというとながかった	28	6.8	7	10.1	4	4.9	5	5.6	8	9.8	4	4.5
全然なかった	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	410	100	69	100	82	100	89	100	82	100	88	100

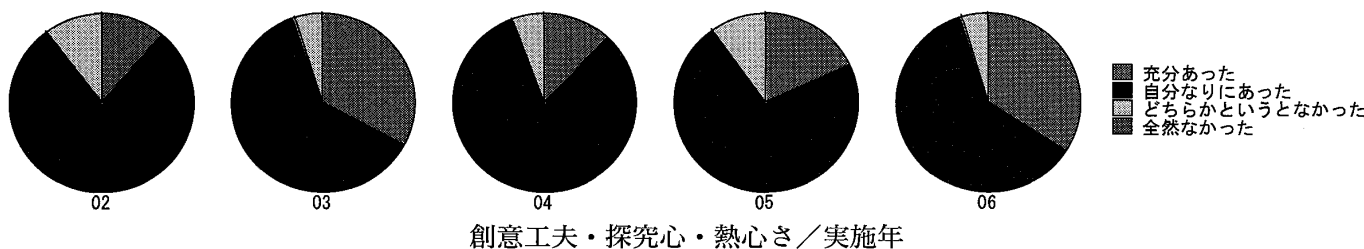
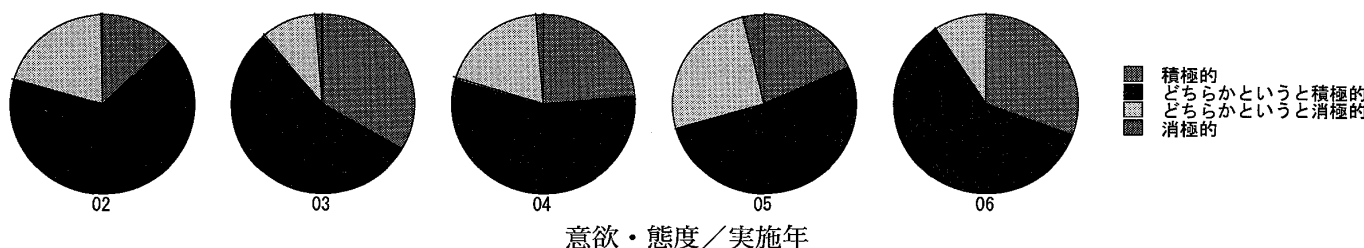


表-17 意欲・態度

	全体		2002		2003		2004		2005		2006	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
積極的	99	24.4	9	13.2	27	33.3	21	23.9	15	18.5	27	30.7
どちらかというとなが積極的	234	57.6	45	66.2	45	55.6	49	55.7	42	51.9	53	60.2
どちらかというとなが消極的	68	16.7	14	20.6	8	9.9	17	19.3	21	25.9	8	9.1
消極的	5	1.2	0	0	1	1.2	1	1.1	3	3.7	0	0
合計	406	100	68	100	81	100	88	100	81	100	88	100



4-2 実習直後の満足度は05年実施学年が低く06年実施学年は高い

実習直後の心境の結果（複数回答3項目まで）が表-18である。「精一杯やった満足感と学ぶ充実感」「満足感」「疲れたが成し遂げた満足感」の回答は2006年実施学生が高く、「自信がついた」「自分のことを充分理解していただけた」の回答も同様であった。2005年度実施学生は低い結果となり、実習園から

の評価3-2でも明らかなように「努力を要する」が最も高い学年であり、実習園・学生双方に満足のない点の多い学年となった。

表-19は実習園の評価が不十分であろうと回答した学生に、その理由を聞いた結果である。実習園の評価予想そのものは他学年と大きな差は見られなかったが、不十分と思われる理由では「自分の思いと園の意向のずれ」が高くなっており、満足した実習ができなかった理由の一端がうかがえる。

また、表-20は保育士の指導について聞いたものであるが、これについても2006年実施学生の9割が充分と解答したのに対し、2005年度実施学生は6割に満たないことから、園の意向をうかがって必要な行動をとることや、自分の意志を保育士に伝えて必要な指導を仰ぐといったコミュニケーション不足が浮かびあがってくる。

さらに、実習で得られた自身の課題では、他学年は「保育援助・指導技術」や、「子ども理解」が高い傾向にあるのに対し、2005年度実施学生は最も高いのが「職員・親との関係・対人関係」であった。コミュニケーション力は実習のみならず、保育者にはもちろん社会人として不可欠なものである。今後こうした課題を持つ学生の増加は予想され、実習教育はもちろん学科専門科目や一般教養科目、課外活動等での何らかの対応が急務であろう。

表-18 実習後の気持ち

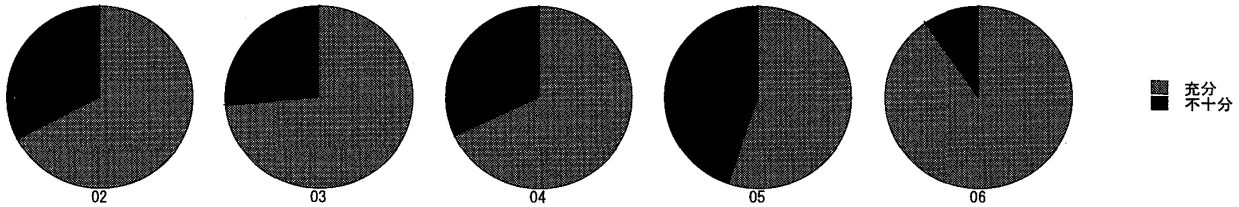
	全体		2002		2003		2004		2005		2006	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
精一杯やった満足感と学ぶ充実感	82	20.3	7	10.1	13	16.9	14	15.9	7	8.5	41	46.6
満足感	113	28	17	24.6	25	32.5	24	27.3	16	19.5	31	35.2
学ぶことは多かったが少し不満	87	21.5	14	20.3	18	23.4	18	20.5	18	22	19	21.6
精一杯だが学びは少なく物足りなさ	25	6.2	6	8.7	3	3.9	6	6.8	6	7.3	4	4.5
疲れたが成し遂げた満足感	172	42.6	23	33.3	38	49.4	37	42	25	30.5	49	55.7
疲れたが終わってほっとしている	171	42.3	32	46.4	33	42.9	35	39.8	25	30.5	46	52.3
徒労感だけ	1	0.2	0	0	0	0	0	0	1	1.2	0	0
自信がついた	100	24.8	9	13	26	33.8	20	22.7	8	9.8	37	42
自信をなくした	20	5	6	8.7	2	2.6	3	3.4	5	6.1	4	4.5
もう実習はやりたくない	7	1.7	2	2.9	1	1.3	3	3.4	1	1.2	0	0
自分のことを充分理解していただけた	54	13.4	8	11.6	8	10.4	7	8	6	7.3	25	28.4
自分のことを全く理解されなかった	11	2.7	0	0	4	5.2	5	5.7	2	2.4	0	0
実習園に不満がある	19	4.7	3	4.3	5	6.5	5	5.7	4	4.9	2	2.3
その他	26	6.4	7	10.1	3	3.9	5	5.7	4	4.9	7	8
全体	404	100	69	100	77	100	88	100	82	100	88	100

表-19 実習園の評価が不十分と考えられる理由

	全体		2002		2003		2004		2005		2006	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
自身の体調や性格・不安	104	50.2	16	45.7	26	55.3	21	45.7	20	42.6	21	65.6
子どもの状態	2	1	0	0	1	2.1	1	2.2	0	0	0	0
園の状況	13	6.3	0	0	1	2.1	6	13	4	8.5	2	6.3
自分の思いと園の意向のずれ	32	15.5	4	11.4	4	8.5	10	21.7	12	25.5	2	6.3
あまり見てもらえていなかった	6	2.9	1	2.9	1	2.1	4	8.7	0	0	0	0
その他	58	28	16	45.7	14	29.8	7	15.2	14	29.8	7	21.9
合計	207	100	35	100	47	100	46	100	47	100	32	100

表-20 保育士の指導

	全体		2002		2003		2004		2005		2006	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
充分	280	71.1	45	67.2	58	73.4	57	67.9	44	55	76	90.5
不十分	114	28.9	22	32.8	21	26.6	27	32.1	36	45	8	9.5
合計	394	100	67	100	79	100	84	100	80	100	84	100



保育士の指導／実施年

表-21 実習で得られた自分自身の課題

	全体		2002		2003		2004		2005		2006	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
子ども理解（発達状況・家庭環境）	127	31.1	24	34.8	24	29.3	30	33.7	16	19.8	33	37.9
保育援助・指導技術	165	40.4	30	43.5	28	34.1	42	47.2	23	28.4	42	48.3
観察力・記録する能力	35	8.6	7	10.1	7	8.5	7	7.9	5	6.2	9	10.3
遊び・自然などの様々な知識	55	13.5	12	17.4	12	14.6	9	10.1	6	7.4	16	18.4
正しい言葉使い・行動	43	10.5	2	2.9	8	9.8	7	7.9	10	12.3	16	18.4
愛情・共感する心・あたたかなまなざし	55	13.5	10	14.5	22	26.8	8	9	6	7.4	9	10.3
豊かな人間性	104	25.5	14	20.3	20	24.4	22	24.7	22	27.2	26	29.9
自分なりの保育観	28	6.9	7	10.1	0	0	10	11.2	6	7.4	5	5.7
職員・親との関係・対人関係	115	28.2	18	26.1	10	12.2	25	28.1	35	43.2	27	31
積極性	84	20.6	13	18.8	16	19.5	15	16.9	19	23.5	21	24.1
社会人としての一般常識	101	24.8	10	14.5	29	35.4	18	20.2	21	25.9	23	26.4
自信をもつ	52	12.7	4	5.8	7	8.5	23	25.8	11	13.6	7	8
健康・体力	29	7.1	5	7.2	5	6.1	9	10.1	5	6.2	5	5.7
広い視野・社会への関心	46	11.3	4	5.8	8	9.8	3	3.4	15	18.5	16	18.4
その他	58	14.2	24	34.8	5	6.1	12	13.5	9	11.1	8	9.2
合計	408	100	69	100	82	100	89	100	81	100	87	100

5. 本学の保育所実習の課題

5-1 実習評価の縦断的分析から

保育所実習の実習園からの評価と学生の自己評価を縦断的に分析した結果、以下の四点が明らかになった。

第一に、実習実施時期と指導体制変更の効果である。2年次に実習を行なうことで、以前に比べ学生が子どもたちの中に飛び込みやすくなったことや、「保育所実習Ⅰ」との連続の中で保育者意識を継続しながら実習に臨む事ができた。この点は実習受け入れ園としても、他養成校との相違が少なくなり、指導が円滑に進む要因と考えられる。また、実習指導体制として新設した「保育所実習指導Ⅰ・Ⅱ」科目は学生の学びや意欲に有効であった。これまで学生は、教員の空き時間にグループ指導を受けるのみで、他学生の実習や学習内容を知る機会がなく、準備や反省のための時間の確保や客観的な視点での学びに課題があった。新設科目により、充分とはいえないが実習の準備・反省の時間が確保され、実習の計画

から実際の様子を検証し反省するという一連の過程の中で、客観的な視点で自らの取り組みを振り返り、子どもの発達理解や保育理解を深める機会となった。加えて、各自・各グループの単発的な学習が他者の学びへ広がり、学生全体の応用力へとつながっている。さらに、実習助手の働きが学生の学習意欲向上や学習効果に有効であった。これまで教員は80名以上の学生の実習指導時間を講義の空き時間を利用するしかなく、一度の実習のために数人のグループ指導が数回必要であるにもかかわらず、十分な指導が行なえない状態であった。また、実習準備として週に一度は保育園に出向き、保育士との打ち合わせや具体的な準備が必要であるが、そのための時間の確保もなされていない状況であった。こうした中で実習指導者として実習助手を配置し、大学での学生への直接指導と、実習日・準備日の保育園での具体的な指導と打ち合わせ・準備の体制を整えた。指導教員の人数は充分とはいえないが、日誌添削指導を含め、複数の目でこれまでよりも細かな指導が行なえたことは学生の意欲向上につながっている。

第二に、実習受け入れ園の4年制大学への理解があげられる。当初は受け入れ側に4年制大学の学生に対する構えのようなものが見受けられたが、改組6年を経て、4年制の学生であっても実習生として変わらないことを理解し受け入れられるようになった。この傾向は実習時期を2年次に変更することでさらに強まった。指導体制側の変化は学生の実習姿勢にも反映され、のびのびと自身を発揮する実習に変化しつつある。

第三に、学生の学習効果を上げるための実習園との協力体制確保の必要性である。上述したような学生の意欲の面での利点と同時に、2年次実習であり、最初の実習であるが故に、学生の子どもの理解や指導能力の不充分さが明らかとなった。これらは子どもと生活を共にする実習での学習が最も有効であり、その中で保育士からの適切な援助・指導の中で身につく能力である。保育士は日々の業務に追われ、また子どもの変化や社会の様々なニーズに対応するだけで多忙な状況での実習指導である。現状での指導は、園や保育士のおかれている状況や熱意、学生の意欲や積極性によって個々の学生の受ける指導内容が大きく異なっている。現状で保育士の業務を妨げず、有効な指導が得られるような体制を確保するために、実習時の訪問だけでなく日常的な園との対話や協力体制を確保するための積極的な努力が必要である。実習終了後の実習園への調査・分析も有効であろう。

第四に、学生の資質の変化とカリキュラムの問題である。生活経験の少ない学生にとって、保育者の専門的な知識としての子どもや保育の理解、技術の習得だけでなく、一社会人としての一般常識や、コミュニケーション能力の習得が必要不可欠である。これらは、従来学生の主体的な課外活動やボランティア、アルバイト経験によって個々に培ってきたものであった。しかし、それだけでは不十分であり、養成校によってはカリキュラムの中にボランティア活動等を必修化し、効果をあげているところもある。実習教育だけではなく、他教科との関連の分析を行ないつつ、一般教育を含めた人間教育の点からカリキュラム構築を急ぎたい。

また、学生の保育志望の意欲や資質の面で入学選抜の問題も残されている。出前授業等の高校との連携やオープンキャンパスでの高校生との交流等きめ細かな対応が求められている。

5-2 今後の課題

短期的に解決可能な課題として、第一に実習指導教員の充実である。現在、教員と実習助手一名ずつにより指導を行なっているが、既に述べたように充分とはいえない状況にある。また、学生の資質の変化は年々大きくなり、コミュニケーション能力の低下だけでなく基礎的な読解力の低下も問題となっており、さらにきめ細かな指導が必要となっている。さらに、実習園との協力の面でも人員確保が必須である。

第二に、本論の実習評価を、専門科目の教育内容や学科の教育体制との関連の視点で分析することである。特に、2005年度から「子育て支援」の講義・演習が教科として配置され、実際の教育を受けた学生が2006年実習実施学生であり、その効果も大きいと考えられる。各教科担当教員の協力を得ながら、包括的な考察が必要である。

第三に、実習園との交流を通して効果的な実習教育体制の確立が必要である。これまで実習園との交

流は、現場の保育業務の多忙さと実習園が広域にわたっているため、多くの場合、実習訪問時と事務的な電話連絡に限られてきた。しかし、効果的な実習教育のためには、実習後の保育者との対話や調査、実習前の具体的な打ち合わせ等が不可欠である。

特に、包括的な分析と実習園との交流の中で、学生の生活経験やコミュニケーション能力の課題をどのように位置づけるべきか検討しなければならない。

長期的な課題としては、一般教育科目と専門教育の関連を分析し、本学の人間教育と保育者養成の方向性を再検討することである。特に、卒業生が保育者として社会で貢献した成果と4年制大学として保育者養成を行なう本学に求められることを整理し、現実の教育の課題を明らかにする中で、入学選抜から卒業にいたるまでの一連の教育内容・教育体制の再検討が必要である。

6. おわりに

6年間の資料データを基に、実習園の評価、学生の評価、地域別の評価の三視点で考察した。実習園の評価からは事前教育の重要性が明らかとなり、事前実習のあり方や事前指導の体制等の課題が浮き彫りとなった。学生の評価からは、実習園の評価と重なる点が多く、自己課題の気づきがなされ、実習の教育効果が明らかとなった。今後はこうした気づきを事後指導でどのようにいかしていくのか、今回取り上げられなかった事後指導の視点からの検討も必要と考える。

引用・参考文献

- 1) 吾田富士子「保育者養成の課題1——保育所実習指導から」『藤女子大学紀要』第40号（II部），2003年，pp.79-90.
- 2) 実習園425園には実習時期の異なる編入生の実習が含まれる。また、当初行なわれていた選択実習は含まれていないので、実質的にはさらに多い。